

南九州におけるゆで豆用ラッカセイの栽培技術

第3報 主要品種の開花習性

川上 求・富山一男 (宮崎県総合農業試験場畑作園芸支場)

Motomu KAWAKAMI and Kazuo TOMIYAMA: Cultivation Technics of Young Peanut for Boiling in Southern Kyushu
3. Flowering Habits of the Principal Varieties

ラッカセイは生殖生長が栄養生長と併行して進行し、開花期間が極めて長い。また、無駄花の割合が多く、結莢率は通常10～20%である。普通栽培に比較して早期に栽培し、短期間で収穫するゆで豆用栽培では、特に品種の開花習性・結莢習性が問題となる。そこで、早播きした場合の品種の開花数の推移について調査を行った。

1. 試験方法

品種はナカテユタカ、タチマサリ、関東66号の3品種を供試した。1990年2月22日、3月16日、4月19日の3回にわたり1/2000aワグネルポットに播種し、出芽後間引いて1本立てとした。2月、3月播種では4月中旬までガラス室内で栽培し、その後屋外栽培に移行したが、4月播種は初めから屋外で栽培した。施肥量 (Kg/a) は苦土石灰:10, N:0.2, P₂O₅:1.4, K₂O:1.6で、全量基肥として施用し、必要に応じてかん水した。1処理5個体について開花数の推移を調査した。

2. 結果及び考察

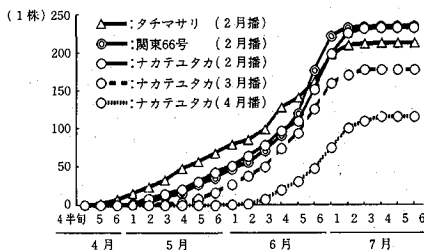
日別開花数の推移: 開花は生育ステージにあわせて進行したが、日別開花は天候と気温に影響された。晴天の気温の上昇した日は開花数が多くなり、天気の良い日には少なくなる傾向があった。しかし、半月毎でみると開花数はなだらかに推移し、栄養生長と併行して進んだ。開花始めは播種期が早いほど早かった。品種についてみると、いずれの播種期でもタチマサリが最も早く開花した。タチマサリは他の2品種とやや異なり、開花初期(4月4半旬～5月4半旬)の開花数が多かった。3品種とも次第に開花数は増加し、6月6半旬または7月1半旬に最大開花数となり、その後急激に減少した。最大開花数は関東66号が最も多く、次いでナカテユタカ、タチマサリの順となった。このような差異は、分枝数の差異によるものと考えられる。これらの傾向は、いずれの播種期でも同様であった。開花期間は2月播種で75～95日、4月播種で45日と、早播ほど短縮した。

累計開花数の推移: 初期の開花数の多いタチマサリが、

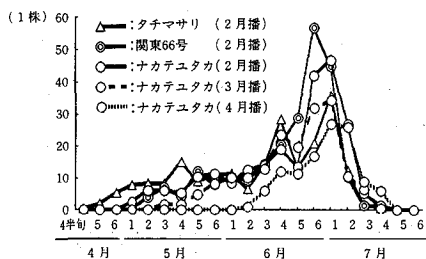
他の品種に比較して高く推移した。しかし、6月下旬にはナカテユタカ、関東66号が急激に増加し、総開花数ではこれらの品種が多くなった。タチマサリは多収品種であることから、総開花数より初期の開花数が収量に影響することを示していると考えられる。

播種期と開花・結莢の関係: 播種期が早いほど開花始めも早く、開花数も多く推移した。しかし、いずれの播種期でも最大開花数は6月6半旬または7月1半旬にみられ、ほぼ同時期に開花終期をむかえた。そのため、累計開花数は早播ほど高く推移し、総開花数では2月播種は4月播種の2倍の数を示した。このことは、早期収穫での多収化は早播が不可欠であることを示していると考えられる。開花後の結莢率をみると、いずれの品種も子房柄の伸長のみの割合が40～50%と最も高く、成熟または中熟に至ったものの割合は合わせて20%程度であった。播種期が遅いほど成熟の割合は高く、開花数が少ない反面結莢の効率が高いことを示している。

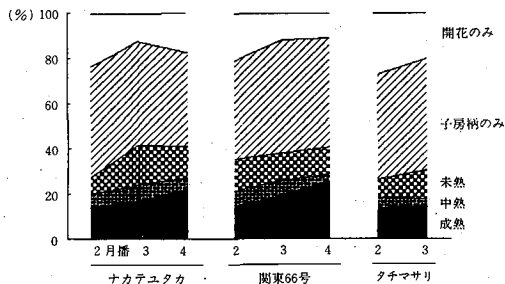
以上のことから、開花・結実に関し日長の影響が比較的小さいラッカセイでは、一定の温度条件下で作期を前進させることによって開花数は増大することが明らかになった。しかし、結莢率の低下から収量に対しては早進歩の効果が小さいと考えられる。また、開花数の推移は品種によりやや異なった。今後はこれらの点を考慮し、早播の有利性が最大限に活用できる品種の選定や、栽培法の開発が必要と思われる。



第2図 累計開花数の推移



第1図 時期別開花数の推移



第3図 播種期と結莢率